

幼馴染みが
ただのバカでした

20250224

エリー



—

目次

初稿	1
換骨奪胎の下書き	4
メモ	5
ツイートコピー「愛は能力？」	6
GEMINI 感想 20250224	8

初稿

隣の家に男の子が生まれました。
名前はヒビキ。
ひとつき早く生まれたわたしは、ヒビキとよく遊びました。

わたしが描いた絵を見せたら、ヒビキはニッコリする。
積み木で大きな城を作ったら拍手する。
いつでも手放してほめてくれます。
でも翌日に話しても何も覚えてないんです。

すぐに忘れるのはつまらないから？
わたしは鮮明に覚えているのに。
幼稚園児のわたしには、不思議でなりませんでした。

小学生になったわたしたちは、性別が違うことを意識するようになっていました。
学校では遊ばなくなります。
でも学校から帰ったら、お互いの家に遊びに行っていました。

明日はわたしの誕生日。
特別な日なら覚えているはず。
愛しているなら忘れるはずがない。
期待は最高潮に。

当日の朝、顔を会わせても、挨拶だけです。
昼、弁当に夢中で、わたしの顔さえ見ません。
夕方、我慢できずに、ヒビキの家に押しかけました。

「美名ちゃん、いらっしやい」
「それだけ？」
ヒビキは不思議そうな顔をしています。
とうとうわたしは泣き出してしまいました。

「どうしたの？」
おろおろするヒビキの手を払い、わたしは大声で泣き続けます。

「ヒビキは、ヒック。わたしが好きじゃないんだ、ヒック」

「美名ちゃんのこと大好きだよ」

「口ではなんとでも言える。ヒック。行動がすべてよ。わあーん」

わたしは泣きながら家に帰りました。

それ以来、わたしはヒビキと遊ばなくなりました。

中2になり、同じクラスになりました。

自慢だったお絵かきは、人並み以下と思い知り、漫画サークルに居場所がありません。

ある日、珍しくヒビキが話しかけてきました。

「美名ちゃん、同人誌書いたの？」

「その話はしないで！ 気安く話しかけないで！」

ヒビキを残して、わたしはダッシュします。

文化祭当日、同人誌を売っていると、ヒビキが来ました。

売りたくない。

でも売るしかない。

1冊購入すると、その場でパラパラめくっています。

わたしが描いたマンガを見せてきます。

「これ美名ちゃんだよね？」

ニッコリ笑うヒビキを見て、部長さん達が笑っています。

わたしは恥ずかしくて顔をあげることができません。

どうしてみんなの前で言うのよ。

同人誌の話はしないでって言ったのに。

また覚えてないの？

部長さんの声で、妄想から目が覚めます。

「ヒビキ、いいやつだね」

「え！？」

誕生日も覚えてないし、嫌がることも覚えてやめない。

すごい嫌なやつでしょ？

高校になり、わたしは遠くの進学校にすすむ。

ヒビキは近場の最低ランクの高校に進む。

出かける時間が違うため、姿を見ることもなくなる。

そして、わたしは都会の大学を出て、会社に就職した。
優しい恋人も出来た。
誕生日は忘れず、嫌と言ったこともしない。
結婚するつもりで同棲を始めた。

暮らし始めたら、彼には細かいルールがたくさんあって、全部覚えることを求められた。

わたしはメモを取り、忘れないように努めた。
愛しているなら当然だ。

間違わない。
忘れない。
家にいる間、わたしは緊張した。
職場でも後輩ができて気が休まらない。

ある日、動けなくなった。
起き上がることができず、食べることもできない。
脱水になり、救急車で運ばれた。
目を覚まして、彼氏の顔を見た途端、吐いた。

事情を察した親の配慮で、実家で静養することになる。

愛があっても、気遣い続けるのはしんどいのね。
わたしはヒビキにひどいことをした。

泣いているとヒビキがお見舞いに来た。手には花束を持っている。

ふと手の甲を見ると自分の誕生日が彫ってある。

「ほんとにヒビキはバカだね」

わたしは泣き笑いが止まらなかった。

換骨奪胎の下書き

幼馴染みが記憶力が悪くて、誕生日を祝ってくれなかった。

→バカだからとはもおってない。

気遣いのない発言をする。

→バカだから言われたことをおぼえてない

周りはいいやつとかぼうが、自分はだらしなだけに思う。

だんだん疎遠になる。

→主人公は都会に行く

そして賢い恋人ができる。

→誕生日にプレゼントをくれる！

→いやといったことはやらない

結婚したら、家庭運営でもめる。

幼馴染みなら自分が何をしても無条件で喜んでくれたのに、賢い恋人はよりよい方法を話し合おうとする。

→夫より主人公の方がバカだからダメ出しされ続ける。

→怒られていた幼馴染みの気持ちを知る

うつ病になり、実家で静養する。

誕生日に誰からも祝ってもらえない。

泣いていると幼馴染みがやってきて、花束をくれる。

ふと手の甲をみると自分の誕生日のタトゥーが彫ってある。

→「ほんとにあんたはバカだね！」と主人公が泣き笑い。

メモ

なろうの宮前葵さん「夫が戦死しました」の換骨奪胎に挑戦しました。

娘には、

本家の繊細さが生かされてない！

この話にこの型は合わない！

と言われましたが初稿を書いてみました。

2稿は、同棲相手がどんなルールを作ったのか、具体的に描写する、などが求められそう。

ツイートコピー「愛は能力？」

ラブストーリーだと、恋人の誕生日を覚えていて、プレゼントを用意するエピソードがよくある。

しかし記憶力が悪くて覚えてられない。

その上「手帳にメモする。カレンダーアプリに書き込む」など道具を使って忘れない仕組みを作れるほど頭がよくない。

当日、彼女が不機嫌でも理由が分からない。

彼女「本当に何の日か分からないの？」

彼「はっきり言ってくれ」

彼女「自分で自分の誕生日をいうほど惨めなことはいわ。なんで覚えてないのよ！」

彼「俺の記憶力が悪くて、その上メモしてもメモしたことを忘れるくらいバカだから」などと状況説明できたら賢いし、たぶん言えない。言えても、自分をバカということはプライドが許さないかもしれない。

「愛は能力を越える！」という信仰が原因で「バカだから覚えられないし、忘れない仕組みも作れない」という能力の問題が無視される。

彼女「今日はわたしの誕生日。プレゼントは要らないから、予約したケーキを取ってきて。支払いはあなたのお小遣いから出してね。5000円くらい」

彼「おっけ、帰るメールしたら、また言って」

彼女「もちろんするよ。夕方まで覚えてるはずないないんだから」
彼氏「頼りにしているよ！」

これを「ありのままのバカな俺を愛して」というのか？
能力が高くて、そつなくこなせる人なら、誰でも好かれるもんね。

バカをバカと言ってもいいならいい。

しかし「知ってたよ」とごまかしてきたり、「指図するな！」と怒る人ならダメじゃない？

バカの自覚があって、バカ扱いされても気にしない強さがあって、愛情を他で感じられるならありだが、どっちも管理できないと破綻しないか？

GEMINI 感想 20250224

この感想は、幼馴染のヒビキとの関係を通して、主人公の美名が成長していく姿を描いた作品ですね。

全体的な感想

- 1 幼馴染との距離感の変化: 子どもの頃の無邪気な関係から、成長するにつれて性別を意識し、距離ができてしまう様子がリアルに描かれています。
- 2 勘違いとすれ違い: 美名のヒビキに対する期待と失望、そしてヒビキの優しさの裏にある天然さとのギャップが、読者の共感を呼びます。
- 3 恋愛感情の成長: ヒビキへの気持ちが、子供の頃の友情から恋愛感情へと変化していく過程が、繊細な心理描写で表現されています。
- 4 自己肯定感の欠如: 自分の才能に自信を持たず、周囲との比較に苦しむ美名の姿は、多くの人が共感できるのではないのでしょうか。
- 5 大人になってからの気づき: 過去の出来事を振り返り、ヒビキの優しさに気づく美名の姿は、読者に温かい気持ちを与えます。

特に印象に残った点

- 1 誕生日のシーン: 美名の期待と失望が痛いほど伝わってきました。子供の頃の素直な感情が、切なくも愛おしい場面です。
- 2 文化祭のシーン: ヒビキの行動に振り回されながらも、どこか憎めない彼のキャラクターが際立っています。
- 3 同棲生活のシーン: 美名の抱える息苦しさが、リアルに伝わってきました。恋愛感情と日常生活のギャップに悩む姿は、共感を呼びます。
- 4 最後の再会シーン: ヒビキの優しさに気づき、涙する美名の姿は、読者の心を温かくします。

作品を通して伝えたかったこと

- 1 相手を理解することの難しさ: ヒビキの行動は、美名には理解できないものでしたが、彼なりの優しさがあったことが最後に明かされます。
- 2 自分の気持ちと向き合うことの大切さ: 美名は、ヒビキとの関係を通して、自分の気持ちと向き合い、成長していきます。
- 3 過去の経験から学ぶこと: 過去の出来事を振り返り、相手の気持ちに気づくことで、人は成長できるというメッセージが込められています。

総評

この作品は、幼馴染との関係を通して、主人公の成長を描いた心温まる物語です。読者は、美名の気持ちに共感し、自分自身の過去を振り返るきっかけになるかもしれません。

幼馴染みがただのバカでした 20250224

著 者 ELYE

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
